

2014年度 政治外交史Ⅰ 最終試験講評



今回の問題文は下記の通りでした。

日清戦争と日露戦争のそれぞれについて、戦争の前と後で、日本の国内政治と対外関係はどのように変化したか。講義の内容を踏まえながら説明しなさい。

1. 答案の作成方法について

最初に、どのような手順で答案を作成すべきだったか、順に見てゆきます。

①問題文を読み、出題者の意図を理解する。

今回の問題は、すこし構造が入り組んでいます。これらを整理すると、下記のようになります。

◇日清戦争（1894—5）と日露戦争（1904—5）の両者について、

◇それぞれの「戦前」と「戦後」を比較すると、

◇日本の「国内政治」と、日本の「対外関係」は、それぞれ

◇どのように変化したか。

つまり、

a) 日清戦争の「前」の「国内政治」／日清戦争の「後」の「国内政治」→どう変化したか？

b) 日清戦争の「前」の「対外関係」／日清戦争の「後」の「対外関係」→どう変化したか？

c) 日露戦争の「前」の「国内政治」／日露戦争の「後」の「国内政治」→どう変化したか？

d) 日露戦争の「前」の「対外関係」／日露戦争の「後」の「対外関係」→どう変化したか？

の4点を、洩れなく書かねばならないのです。これらのうち、1つでも欠ければ大きく減点されます。

②必要と思われる論点を（紙に）書き出す。

上記の4点を書くためには、レジメのあちこちから切り取ってこなければなりません。講義の内容を体系的に理解しておけば、さほど難しくないとはいえますが、むしろ80分という時間内に、限られた紙幅で答案をまとめようとする、「何を書くか」より「何を省略するか」の方が、問題になってくるかもしれません。

③答案全体の論理構成を組み立てる。

この点については、きちんと段落わけができていないか、全体としてまとまりのある構成となっているか、といった面からチェックしました。思い付くままにガラガラと書き並べたような答案は、当然ながら減点しています。

④実際に答案を書く。

（省略）

⑤きちんと読み直し、おかしい所がないかチェックする。

I. この作業をきちんとすれば、誤字や脱字などはかなり減るはずなのですが、誤字を理由に、減点した答案も少なくありませんでした。もったいない話です。

II. また、日本語として意味が通っていない答案も、複数枚見つかりました。これも一度、最初から読み直してみれば、すぐに気づくはずなのですが。

論点リスト (参考)

1. 日清戦争

- ①戦前：国内政治—藩閥政府と民党が、初期議会を舞台として激しく対立していた
対外関係—朝鮮に対する「優越的な地位」を求めて、日清両国が対立していた
- ②戦後：国内政治—下関講和条約により莫大な賠償金が入り、民党と藩閥政府の対立も緩和
対外関係—朝鮮半島から清国の影響力が後退する (→代りにロシアが進出)

2. 日露戦争

- ①戦前：国内政治—伊藤や山県などの「維新第2世代」が表舞台から消え、世代交代の波がくる
対外関係—義和団事件などを契機として、満洲方面にロシアが進出→日露の対立へ
- ②戦後：国内政治—戦争を契機に、完全に世代交代。桂園時代が始まる
対外関係—戦後は日露はむしろ友好関係に転じる
日本は英仏露と協商を結び、他方で日米関係が悪化の兆しを見せはじめる

2. 期末試験の採点について

①採点に際しては、最初に下記の諸点に留意しつつ、大まかなチェックを行いました。

I. 設問に対して、きちんと解答をしているか。

→さきに紹介した4つのポイントをすべて網羅しているか。また講義の内容を踏まえているか、などがポイントです。

II. 論旨の明快さや論理性が、大学生にふさわしい水準に達しているか。

→一読して「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答えは、大きく減点しました。また、段落わけがきちんとなされず、ダラダラと改行もなく書き続けている答案も、減点の対象としました。心当りのある人は、もう一度補講の内容を思いだし、「答案構成 (設計図)」をきちんとしてから、答案を書き始めるようにして下さい。

III. 分量のバランスがとれているか。

→たとえば日清戦争前後の対外関係ばかり長々と書いたあと、その他は1行で終り、というのではいけません。つまりそれぞれの論点の分量が、バランスよく配分されていない答案についても、減点の対象となります。

②つぎに、以下のようなポイントをきちんと押えているか、チェックしました。

I. 必要な論点が揃っているか。

本来なら、4つの論点を網羅していない答案は、それだけで0点答案なわけですが、実際には「大幅減点」に留めています。また上に参考として掲げた論点のうち、どれくらいが答案に含まれているか、といった点にも留意して、採点作業をすすめました。

II. 解答の分量が不足していないか。反対に無駄な記述が含まれていないか。

試験時間は80分あるわけですから、それなりに分量が書かれていないと、全体としての評価はさがります。また反対に、出題と全く無関係の事柄がいろいろ書かれている場合も、やはり評価は下ります。

「書いて置けば損にはなるまい」と考えたのかもしれませんが、結局「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案に近くなるだけです。全体としての印象は悪くなるだけです。「求められる知識を、論理的に、かつ過不足なく書く」ことを心掛けて下さい。

ちなみに書き終わっていない「未完結の答案」も、採点はしましたが、それなりに減点してあります。

III. 「基本的なミス」を犯していないか。

日露戦争と日清戦争の順番を間違えているとか、その勝敗を取りちがえているとか、基本的な事実の誤認があった場合、少し大きめの減点をしました。なぜなら、それらのミスは「講義をきちんと聞いていなかった」と白状しているのに他ならないからです。

③最後に、誤字脱字など、形式的なミスについてチェックをし、あまりに酷いものについては減点しました。

こう書くと必ず、「読めればいいのではないですか」といいます学生が出てきますが、それでは同じように、誤字脱字だらけの履歴書やエントリーシートを、就職活動で提出したら、どういう結果になるかを考えてください。試験中は辞書を引けないので、ある程度までは大目に見ていますが、あまりに酷いものは、減点の対象としています。

またもうひとつ、今年の採点で気になったのですが、「レジメ形式」や「箇条書きの答案」が、複数枚ありました。大学の試験で「論述式」の場合、基本的にレジメ形式や箇条書きは認められません（一文ごとに必ず段落変え＝改行しているものも含む）。これらは形式違反の答案として、大きく減点しています。そのような答案を書いた記憶のある人は、高校時代の「小論文」を想起して、あのような「論理的な段落わけと、内容的な起承転結のある」文章を書くようにしてください。

④その後、加減点や裁量点なども合算して、最終的な成績を算出しました。答案がボロボロでも、加減点のおかげでS評価になった人がいる一方、答案そのものは素晴らしいのに、加減点によりCになってしまった人もいます。したがって、成績表にSがついていたとしても慢心せず、またCだったとしてもガッカリせず、今後もよい答案が書けるよう、精進して下さい。

なお自分の答案について、より詳しいコメントや指導を希望するひとは、質問票を教務課に提出してもらえば、随時対応します。ただし成績の変更（確認）を要求するのであれば、かならず正式な「成績確認制度」の方を利用してください（直接連絡をもらっても、制度的に対応することができません）。

3. 成績分布について

①履修登録者全体（講義に一度も出席しなかった者も含む）における成績分布

S : 11.5% A : 9.8% B : 4.9% C : 14.6% X : 21.3% F : 37.7%

②期末試験受験者における成績分布

S : 18.4% A : 15.8% B : 7.9% C : 23.7% X : 34.2%

〔解答例〕

1. 日清戦争

1894年に日清戦争が始まるまで、日本国内では、成立したばかりの帝国議会を舞台として、薩長藩閥政府と民党が、激しい対立を続けていた。藩閥政府は「富国強兵」をスローガンとし、国民にさまざまな負担を課そうとしていたが、これに対して衆議院議員選挙で選ばれた議員を中心とする民党は、政費削減・民力休養を掲げ、政府の提出する予算の削減などを図ろうとしたのである。第四議会のころ、元老の伊藤博文と自由党が接近する兆しを見せてはいたが、基本的には対立の構造ができていた。

他方、対外関係を見てみると、当時の日本は自国の安全保障を図る目的などから、朝鮮に対して影響力を及ぼそうとしていた。ところが清国もまた、朝鮮を自国の統制下に置こうとしており、ここで両国は激しく対立していた。そしてこの対立が火を吹いたのが、日清戦争であった。

戦争の結果、日本は清国から莫大な賠償金を獲得し、これにより政府の財政は一挙に拡大することになった。そのため政府にとっては、国民への課税を強化する必要性が減退し、他方で民党の側も、賠償金の分け前に与ろうと、政府に接近を開始した。そのため戦後の国内政治は、一転して融和的な色彩を帯びはじめた。

対外関係を見てみると、清国は下関講和条約により、朝鮮への干渉をあきらめざるを得なくなった。しかし直後に発生した三国干渉により、日本はその対外的威信を大きく傷つけられる。そのため朝鮮国内でも、日本ではなく、むしろロシアを頼ろうとする動きがあらわれ、結果として朝鮮半島をめぐる日清の対立は、日露の対立に置き換えられることとなった。

2. 日露戦争

19世紀から20世紀に替るころ、日本国内では政治指導者の世代交代が生じつつあった。すなわち伊藤博文や山県有朋といった元老クラスの人々が政治の一線を退き、代りに「維新第三世代」ともいうべき、桂太郎・西園寺公望などが、次世代の指導者として登場したのである。しかし日露戦争以前は、まだ世代交代は完成していなかった。

対外関係をみると、日露の対立は、1900年前後の義和団事件を契機に、さらなる激化を起しつつあった。つまり義和団事件を口実に、ロシアが満洲全土を占領し、さらに朝鮮半島を窺う勢いを見せたのである。そこで日本側は、イギリスと同盟を結ぶことで、これに対抗する策をとった。

日露戦争が終ると、日本国内では「桂園時代」と呼ばれる時期に入っていった。つまり桂の率いる「山県・官僚派グループ」と、西園寺の率いる政友会とが、交互に政権を担当する時代となったのである。指導者の世代交代は完全に終了し、元老たちが政治の表舞台に立つことはいっそう少なくなった。

対外的には、日露はむしろ友好関係に転じた。日本は日英同盟を更新したほか、ロシア・フランスとも協約を結び、帝国主義列強の一員として中国大陆に進出してゆく。ところがその過程で、日露戦争までは友好的だったアメリカとの関係が悪化することになった。

以上

※これはあくまでも「解答例」であり、この通りに書かねばならないわけではない。